

の運営委員会席上、どうも資本主義といった問題が正面に据えられない、相手なしに家・家族が論じられ、「資本主義と家」が具体的に双方の関係として把握されてないという指摘がなされ、年報の題名としては確かに「日本資本主義と家」というのは宣伝効果があつてはなはだいいのだが、課題として的をじぱりにくかつたのではないか、「資本主義と家」の問題関心を持続しながらもう少しテーマを具体化したらどうかということで、例えば、土地持ち労働者の問題とか、出稼ぎ・兼業化の問題がだされた。会員一般からは、「現段階における農民の主体の形成・ムラの形成」・「農村の開発と住民の対応」・「農村自治をめぐる問題——例・村落構造の変化と農村自治」・「一九七〇年代の農家（農村）の性格と展望」・「都市近郊農村の変貌（構造的変化）」・「『むら』の改變・解体」といった提案がよせられていたが、運営委員会としては、そこからはなかなか具體化の方向をしばれなかつた。

昨年度・今年度の反省のうえに、その具體化の必要という線について、いっそここで農民の「生活破壊」の状況をとりあげ、農民の「生活」論がしばしば説かれる問題の所在を具体的に検討してみてはどうかといった提案がなされた。「高度成長」の過程に広汎に進んだ農民の生活破壊の現実から出発し、破壊される以前の「農民生活」とは何だったのか、農民の伝統的な生活の枠組みとは何だったのか、それを破壊するかと破壊される側の農民との関係のなかで生活破壊の実相をつかんでゆく、現に生活破壊が進むにもかかわらず、よくいわれる生活擁護の斗いが何故広汎な農民をとらえないの

◎第一四回大会に向けて

来年度共通課題についての提案

— おくればせながらここで、農民にとつての
・生活破壊・とは何かを問うてはどうか。 —

運営委員会 島崎 稔

大会開催中、昨年度・今年度と二ヶ年、「日本資本主義と家」を共通課題に掲げた成果を運営委員会として検討した。「日本資本主義と家」が共通課題とされた経緯については、既に『研究通信』にもたびたび紹介されてきたところもあるし、いまはふれない。二日目午後の共同討議では、農民の家族労働の評価、農業労働組織の変化、労働力市場との関係等をめぐつて若干問題をほりさげられて討論され、一応の成果をあげたとも思えるが、発表終了後の時点で

か、・生活を守る、とは一体農民にとって何なのか、こういった一連の問題が農民・農村の現状分析と生活史研究として問われていいと思う。村研の大会は抽象的に「生活」定義を披露するところではないが、年間の定期研究会などで、流行の「生活構造論」・「生活過程論」を検討してみてもいいであろう。「生活」といつても、小生産者の場合、原理的に、労働者のように(「労賃」範疇の確立)、生産と別に消費生活が明確に分化してこないが、農民層分解の現状のなかで、このような「生活」と「生産」の分化がどこまで進行し、完全には分化しきらない状況のなかで、生活破壊は、直接、小生産の生産力破壊の意味をもつて深刻化している問題点がはつきりされる必要があろう。

さしあたって、現状分析の立場から一応大まかな柱をたてておこう。

1. 生産力破壊と分解の促進

過疎・過密による農業生産基盤の荒廃化は、今までないが、それは平場地帯にも意外に広がっているのではないか、不動産業者による土地の買占め、土地利用のスプロール化現象の進行、農業用水の汚濁等による農業破壊が農村・農民の生活をいかに荒んだものにしたことだろう。雑草におおわれた農道をみると決してまれではない。ただここで注意すべきは、このような農業破壊が単純一律に農家経営をおしつぶしているとは限らないことである。外圧によって存立の条件をいよいよせばめられながら、きわめて歪んだかたちで農民層分解が促進される。最近、わたくしは群馬の鉱害地農村

を歩く機会をもつたが、かつて「農村労働者」層として貧農層とは別の規定を試みた七反以下層が、そこではほぼ完全に農業生産から離脱・農業放棄し、他方にその借入地を煙害の少い牧草地にかえた八桁農家が存立していた。離脱にまでいたらない農家のあいだで、主婦労働を主体に、企業の無償提供とか、人工飼料による稚蚕の共同飼育が試みられておりした。資本による農業破壊が誰の目にもおおいがたいものとなつたとき、運動として有機農法が注目を集めている。その・反科学・的な志向をどう評価すべきか。この段階で、農法論が重視される所以を理解する必要があるが、前提として危機論を忘れてはなるまい。

2. 伝統的生活枠組みの解体

農業生産力の破壊、歪んだ分解の進行のうえに、農民の伝統的な生活枠組みの解体もまた進んでいる。いえ――むらの生活秩序は村研にとって常に古くして新しい問題である。「農民層分解」―むらの解体」の論法には批判があり、「むら」の再確認が指摘される。かつて、農地改革後の状況のなかで、分解の・正常な・展開による・部落結合の死滅・の可能性を指摘した論者もあつた。部落結合は生きつづけた。生きつづけながらその秩序はほとんど破壊されつくそうとしている。課題の出発は、・村は生きている・という発見・回想にあるのではなくて、破壊の現実にたつて何が斗いとられなければならないかということであろう。『研究通信』の前稿で、今の段階であらためて農村自治論をといった提唱もその意味であつた。それは困難な課題であろうけれども、このような前向きの論理に対

して、これまでの村研は余りにも無力であったのではないか。その検討のためには、研究会などで、社会主義下でのコルホーツや人民公社の問題などもとりあげていいのではないか。

3. 「生活破壊」の実相

農業生産力破壊——分解の歪んだ進行——農民生活の枠組み解体の道筋のうえに、まさに具体的な農民の「生活破壊」の実相が広汎に報告されてほしい。その材料にはこと欠かないであろう。農業労働力の老令化・婦女子化は農業生産力破壊の問題であると同時に、農村における老人問題・婦人問題を提起している。機械化・農業・過労とともになう健康破壊がいかに農民の生活を追いつめていることか。農業Ⅱ農村の危機的状況が叫ばれながら、農村の生きた社会問題は、とかく実践家か、農業経済学者・農村社会学者以外の人にもかかっていたのではないか。農業Ⅱ農村研究者にも、危機に際して政策立案能力がためされる段階である。その意味でも、理論と政策との統合を進んで考えてゆく必要があるようと思われる。

× × ×

来年度課題についての提案が、整理されないままの思いつきに終つた感があるが、今後、宿題委員会・各地での研究会で深めていただくことを期待している。
(一九七五・一〇・三〇)